

2013年1月、別冊『多木浩二と建築』の編集作業が大詰めの頃、いくぶん投げやりな事実が誇張された文面で、ある住宅の見学会を案内するメールが届いた。——この度、「代田の町家」が消えることになりました。その前にご覧になることができます。——

《代田の町家》(1976)は、『多木浩二と建築』のために20時間にわたるインタビューを終えていた坂本一成氏の設計作品であり、なおかつ坂本氏と多木氏の思想的な交流が始まるきっかけになった住宅でもあった(参照=坂本一成インタビュー「坂本一成による多木浩二——創作と批評の共振」『多木浩二と建築』2013)。さらに『多木浩二と建築』では、多木氏が撮影した《代田の町家》の写真を裏表紙に借りるつもりでもあった。要するに特別な建築だったのである。

実際には、その時点で建物は空き家になって売りに出されただけであって、「消えること」までは決まっていなかったのだが、お別れ会のような雰囲気の見学会を終えた後、思うところあって住宅の現状を訴える文章「《代田の町家》の危機」をインターネットメディアのdezain.netに投稿し(2013年2月22日掲載)、『多木浩二と建築』刊行後の5月には、住宅の見学会を兼ねたイベントを《代田の町家》内で開催した。

ことの顛末は、先ごろ刊行された『新建築住宅特集』2015年2月号で報告されている通りである。その後も空き家状態が続くなか、優れた住宅建築を後世に継承していこうと活動する住宅遺産トラストが介入し、再び見学会が開かれ(2013年10月12~14日)、そこに建築の価値を共有する買い手が現れることになった。建物も設計者自らの手で、おそらく最良に近いかたちで改修が施されるに至ったのである。

《代田の町家》をめぐるのはひとまずこれで一件落着だが、今回この住宅に起きた一連の出来事、および私が「《代田の町家》の危機」で書いたことは、この特集の問題意識にも繋がっている。そう感じて、ここで「《代田の町家》の危機」を再録することにした。それに続く坂本氏へのインタビューは、より広範なテーマのもとで行なわれたが、やはりこの一連の出来事と深く関わっている。



『多木浩二と建築』刊行記念イベント
「建築批評の内と外」

八束はじめ × 坂本一成 in 代田の町家
2013年5月6日
※動画記録を本誌HPで公開中(約110分)



《代田の町家》の危機

長島明夫

坂本一成の《代田の町家》が建つ土地が売りに出されている(g.o.o.住宅・不動産)。

価格八七〇〇万円、土地面積一三〇・六三平米、坪単価二二〇・一七万円……。情報で

は売り物はあくまで世田谷区代田三丁目の土地であり、建築に関しては現況の注意書きとして「上物有り」とだけ記されている。とはいえその上物は築四〇年近くになって、もちろんそれなりに古びてきてはいるものの、竣工当初の床暖房もいまだ現役であり、住むことに大きな障害はないように思われる。住み続けてきた住人がこの家を離れるのは、また別の人生の理由によるようだ。筆者は二〇〇五年に取材でこの住宅を訪れたことがあるのだが[*1]、建築作品としてのあり方が尊重されつつ、丁寧に住まれている様子が印象に残っている。二点の写真はその取材の日に撮影した。

この住宅が建てられた一九七六年は、日本の現代建築史上、きわめて重要な住宅の竣工が重なった年である。よく知られるのは篠原一男の《上原通りの住宅》であり、安藤忠雄の《住吉の長屋》、伊東豊雄の《中野本町の家》だろう。そして坂本一成の《代田の町家》は、その奥床しきゆえ知名度こそ前記の三作におよばないが、作品の価値は決して劣らない。それにしても仮にいま安藤忠雄の《住吉の長屋》が売り

に出されたら、どれだけ大きなニュースになるか。というより、たとえ持ち主が替わるとしても、「g.o.o.住宅・不動産」に「上物有り」の情報が載ることは考えられない。その建築の価値を共有した人同士での内々のやりとりが交わされるに違いない。いざとなれば建築家本人が購入するのではないかとという予測もできる。けれども《代田の町家》は風前の灯火のごとく、現代の消費社会を漂っている。

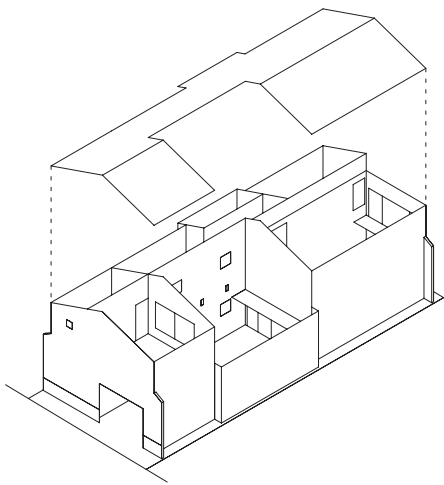
結局のところ、家は個人の所有物である。他人がとやかく言えるものではないのかもしれない。よその家のことは分からない。もちろん自由に出入りすることはできないし、ごくまれに内部を見学できたとしても、それはあくまで見学であり、建築の本領が発揮されるべき日常のなかで十全に経験することはできない。あるいは、私は《代田の町家》の前を毎日行き来するわけでもない。もし《代田の町家》がなんらかのかたちで現存し続けることになったとしても、私はこの先、その家を訪れることも目にすることもなく死んでいくかもしれない。そんなとき、その家がこの世に存在す

[*1]『住宅70年代・狂い咲き』エクスナレッジ、2006

るのとしなないと、私にとってなにか違いはあるのだろうか。あるのかもしれないし、ないのかもしれない。しかし私はその違いがあるという世界に生きていたい。

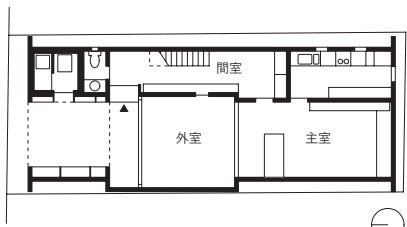
きつと《代田の町家》が内包しているのもそんな世界なのだ。自分がある以外の離れた場所の存在を想像し、その存在とともに自分が在ること。

この住宅は、設計者が並列関係と呼ぶ、複数の室の関係によってできている。私はそのうちのどこかひとつの場所にしか身を置くことはできないが、そこでその場所自



体の居心地の良さを感じるとともに、不思議と自分がいる以外の場所への想像が広がる。むしろその想像の広がり、自分がいる場所の居心地の良さをもたらしているようにも思える。いま自分がいる場所がすべてではない。他の場所への想像は、必ずしも視覚だけによって直接的になされるのではなく、建築全体の抽象的な構成（室同士

の関係）が観念として頭に浮かび上がってくる。個別の場所の身体性と、それを相対化し、建築全体のなかで位置づける観念性。このふたつのあいだに、この建築の体験は



代田の町家 1階平面図 1/350

ンチが設けられ、領域を区切る。さらに上部もパーゴラが渡されて、屋根はないまでも直方体の輪郭が切り取られる。廊下ならば、慣習的な廊下としての機能や雰囲気は残しつつ、慣習よりもやや幅を広くとり、また棚を造り付けることで、場所としての存在感が高められている（このような中庭と廊下のあり方は、それぞれ「外室」「間室」と



して、設計者のなかで概念化されている）。ところでこうした設計上の細かな操作は、ひとつひとつを取ってみれば、決してそれ自体が建築表現と呼べるような大それたものではない。《代田の町家》の室の組み合わせ方は、一般的なマンションや建売住宅のように、ステレオタイプ化した慣習や家族像（それらは商品価値にもなる）に則るわけでもなければ、経済的な合理性が優先されているわけでもない。と同時に、いわゆる作品としての建築表現を前面に出すわけでもない。それら外的な「意味」から離れたところで建築を組み立てることによって、そうした「意味」に回収されないまま、より純粋に体験者に建築の構成を知覚させる。

当時、《代田の町家》の価値を誰よりもするどく見いだした多木浩二が指摘するように「*2」、こうした「意味」の消去は具体的な構成材をあつかう手つきにも見られる。この規模の住宅の仕上げとしては極めて異なる床の大理石は、それゆえに大理石という素材がもつ社会的な意味や、住宅の床はこうあるべきという無意識のうちの慣習的な意味を引き剥がし、床そのものを具体的な

生成して来る。

言ってみれば、ワンルーム以外のあらゆる建物は「複数の室の関係によってできている」に違いないのだが、この《代田の町家》の特別な体験の背後には、そうした関係を際立たせる周到な設計がある。まず具体的なレベルでの室の組み合わせ方についていうと、たとえば二層吹き抜けのリビングは、隣接する中庭を介して視線がエントランスの車庫を抜け、前面の道路にまで至る。同時に二階の廊下ともガラスの窓で隔てられつつ、見上げる／見下ろすの関係がある。さらにリビング内には、大回りして二階の和室を通ってでないと行けないデッキが張り出している。こうした空間の連続と分節の多様なあり方が、ひとつの場所にいながら複数の場所の遍在を知覚させることになる。

また、中庭や廊下といった、一般には場所の輪郭が意識されにくい空間も、その輪郭をより強く描くことで、一個の独立した場所として知覚されやすくなっている。中庭ならば、道路側からはぎりぎり乗りこえできないほどの高さでコンクリートのべ

かつ抽象的に知覚させる。同様に壁の緑甲板も、はじめから白いボードを使うのではなく、白いクロスを貼るのでもなく、あくまで板にペンキを白く塗ることに、意味までが漂白され、具体的な物として、抽象的な壁として、その存在が知覚される。こうした操作もまた、個々の場所の抽象度を高め、建築全体の構成を主体の観念のうちに浮かび上がらせることに寄与するだろう。

他人の所有物である《代田の町家》の存在が、そこから離れた場所にいる私の人生とどのような関わりをもつのか。その問いと、《代田の町家》での複数の場所のなかで自分が位置づけられる体験とは、単に図式的に類似が指摘できるという以上に、あるいは結果的にそういう論理が立てられるという以上に、分かちがたくつながっている。ふたつをつなぐのは、自らが現代社会を確かに生き、震える魂でそれと向き合う坂本一成の思想である。《代田の町家》はその建築家の精神が形象化されたものとして、今のところ世田谷の住宅地の一面に建っている。

*2] 多木浩二「『形式』の概念——建築と意味の問題」『新建築』1976年11月号、所収=『視線とテキスト——多木浩二遺稿集』青土社、2013。本誌別冊『多木浩二と建築』（2013）でも該当する節を掲載。